

〔飼鳥必用〕丹頭

本朝江飛行いたす鳥にてなく、唐方より長崎江持渡り、日本の地にて玉子産たるを生立候得共、世に數羽飼たる者も無之、東都御城之内に産巢ありて、年々雛生立候共、聞傳へし計り、奥州會津の城主の飼鳥ひな相生立の由、外にも玉子かへれども雛にて落、玉子産候てもかへる事なし、何れにもふへかね候は、名鳥ゆへか、親鳥にて雌雄も分り兼候得共、朝夕啼立の節、雄はつばさを割、少し羽廣ダ、頭をあげ少し聲に口有り、是を雄とす、雌は啼迄には羽をつかはす、此所にて雌雄に目をつけると、會津の鳥方物語りに、丹頭の雌雄峙の折、雄は早く羽を揃へ、雌は遅く峙仕舞しとの事を聞、此人餘り功なき哉、會津の鶴産巢には玉子を落、雛生立しゆへ時にも遅くか、り可申也、雌雄相揃産巢にてなき鳥ならば、其差別なく同様に峙も仕舞可申事に候、略○中就中江戸表にて丹頭放レ場の内に、少し田面をあらば、玉子産飼方、龜抹なりとも生立可申候、玉子産そるへ暖候日より三十三日の日數にて、いつれの鶴もかへり候也、けら虫はさみ虫の類にて飼立、鱸鱒の類喰せ、雛大くなるに付、飼方宜敷し、蚓は親鳥の拾ひくれ候故、つかはすに不及、尤親鳥は米粃と鱸鱒のるい、毎日飼事は鳥飼の知ル所也、乍去爰に記す、

姉和鶴

本朝にまれに飛來りて多く不渡、寛政年中、大坂鳥や丸屋四郎兵衛方へ番飼置たりしを初て見たるに、總羽薄鼠色大羽背の邊には黒羽あり、胸に長羽ありて、黒鶴より少し小形にて、鶴の形よりは鴻の形似たり、餌物常の鶴に同じ、至て目出度鶴と、古人の物語りを聞し也、

真那鶴 白鶴一名袖黒鶴共云、是は大羽先き黒き故也、黒鶴

何れも飼方米粃鱸鱒常に飼也、真那鶴の産巢は世に多かりし、黒鶴の産巢をば未聞す、此鳥手馴ざるものにて、人に便り手虫にてても取よふなるおだしきはなきもの也、世に多ゆへ飼方に手入